

主体的な学習態度を育む小学校国語科ノートづくりの研究

原 田 義 則[鹿児島大学教育学系（国語科教育）]

原之園翔吾[鹿児島大学教育学部附属小学校]

Elementary School National Language Study Notebook Instruction That Fosters Proactive Learning

HARADA Yoshinori and HARANOSONO Shogo

キーワード：主体的な学習態度、大村はま学習記録、1年間を通したノートづくり

1. 研究の目的

OECD（経済協力開発機構）の Education2030 では、Volatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）（以下、VUCA）という不安定な未来社会を「生き抜く力」について言及している⁽¹⁾。必要なコンピテンシー（知識、スキル、態度及び価値観等の領域から構成される個人の能力）は、「新たな価値を創造する力」「対立やジレンマに対処する力」「責任ある行動をとる力」とした。注目点として、キーコンピテンシーを獲得するには、生徒が自らの学習のエージェントとなることを前提とした点である。すなわち、教師が単一の知識や価値を訓詁注釈したり、多層化する「学力」のすべてを教師が引き受けその結果カリキュラム・オーバーロードになったりするのではなく、児童生徒自身の主体的な学びを実現する授業への転換が必要だとする。さらに同報告では、主体的な学びを成立させる授業スタイルとして、学習者と人的・物的環境との相互作用を通した、見通し（Anticipation）、行動（Action）、振り返り（Reflection）から成る「AARサイクル」を挙げている。また、文科省からの提言も見逃せない。2021年3月の国立教育研究所『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』（以下、「参考資料」）では、平成29年告示の学習指導要領で明確化された資質・能力の育成に向け、児童生徒自身が学びを「学習調整」し、「粘り強く取り組む」主体的な学習態度の評価と一体化した指導を求めている。

これらの理念を実現するには、どのような授業スタイルが望ましいのか。働き方改革に着手している学校現場でも、持続可能な方法の提案が必要である。

そこで本研究では、「参考資料」で具体例として挙げられたノート指導に「AARサイクル」を重ねることで、児童生徒が粘り強くノートを書き綴り、学習の方向性を調整したり、学習内容を拡充したりする姿の実現を目的に据えた。もちろんノート指導については、ワークシート研究も含めて多くの先行実践がある。また、ICTの利活用という視点も考えられよう。しかし、漢字力や文章記述力など、書く力の基礎を育成する小学校国語科教育では、いつの時代においても紙媒体に手で書くことを放棄しない。児童が自らの手で行うノートは、小学校国語教育における重要なアイテムである。以下、現職教員と共に進めている2年間の研究の一端を述べる。

2. 研究の内容及び方法

2.1. 小学校現場における国語ノート指導上の課題

鹿児島国語研究会原国会では、教職2年目から30年以上の現職教員65名が集い、年間を通して国語科教育について研究を進めている。会員の所属先は、県内外の小・中学校教員、特別支援学校教員、管理職・行政等であり、学校現場と直結した実践的研究に取り組んでいる。本研究を進めるにあたり、同研究会で調査を行った。ここに記し、謝辞としたい。以下、結果の概要を示す。

○ 調査実施日

- ・アンケート調査 令和2年1月25日(土) 13:30~14:30
- ・ノート指導に関する意見の聞き取り 令和2年2月22日(土) 13:30~14:30

○ 調査場所 鹿児島市立武小学校校区公民館

○ 対象 鹿児島国語研究会原国会会員 35名

○ 方法 教職経験年数別(10年未満・10年以上)で1グループ5人程度で実施

○ 結果の概要

① ノートに対する児童の意欲について(アンケート調査)

- ・全グループから共通して、児童のノートに対する意欲が低い実例が挙げられた。

(例) 児童は、ノートについて「捨てるもの」として認識している。

「書くこと」自体を嫌がるため、ワークシートの「枠」を埋める作業をさせている。

また、「枠」が少ないほど児童に喜ばれるので、授業内容も「板書の答えをワークシートに写す」という授業になっている。

② ノート指導で留意している点について(意見の聞き取り)

ア 教職10年未満グループ(経験学校数1校~2校)

- ・単元や教材にとらわれない共通の型を揃えたノート指導

(例) 日付, 単元名, 教材名, 筆者・作者名, 学習のめあて・まとめを書かせる。

自分の考えや振り返りを書かせたい。(時間が無いので悩んでいる)。

ノートで使う色は3色までとする。

イ 教職10年以上グループ(経験学校数3校以上)

- ・単元や教材の特徴に応じたノート指導(学習指導要領に明記された指導過程に沿って)

(例) 思考ツールを活用した自分の考えの記述(学年に応じた文字数の制限)

漢字・語句の意味調べ→単元の学習計画→初発の感想→毎時の活動記録→まとめ

る・振り返り等の学習過程に応じたノート指導

この調査結果から小学校現場における国語ノート指導上の課題として、以下の3点が挙げられる。

- a 学業指導面と学習指導面の両面を備えた(型式が整理された)ノート指導とは
- b 書くことへの抵抗が軽減される(書き慣れる)ノート指導とは
- c 価値の認識を醸成する(ノートを大切に使う)ノート指導とは

次項では、挙げられた課題を解決する具体的な指導法として、先行実践例を概観する。

2.2. 先行実践例の分析

本研究を実践的に進めるために、まず先行実践を踏まえておきたい。

大村(1984)は、「国語の学習帳は、他の教科とちがって学習帳そのものが国語の学習である」「学習帳の指導は(中略)ある日意外な成果に気づいて驚かせられるほど、効果の大きいことである」とし、学習者・指導者にとっての学習記録(学習帳)の効果について次のように述べる⁽²⁾。

- ・気軽に書く習慣をつける。
- ・幅広く各種のものを書く力をつける。
- ・考える方法としての「書くこと」を知る。
- ・書かれたものを通していろいろな方面について、細かく評価できる。
- ・指導の効果と欠点をよく知ることができる。
- ・指導が適当であったか、教師にとって、実により反省資料となる。
- ・学習に関するいっさいのものが散らずに一まとめになっているので、教師が指導法等の研究をする場合の多くの便宜が得られる。

具体的な内容は、生徒の学習記録に付随して提出させた自己評価表が参考になる。同書には、中学校1年生から3年生までの実践例が掲載されているが、実態に応じてその都度観点が変化しているため、以下共通点を8項目に整理する。なお、()の内容は同書の解説から抜粋した。

- ・提出日に提出(学習記録は、「した」ということ自体を大切にした。)
- ・すべきことがしてある。
- ・内容(正しさ、ゆたかさ)。
- ・通信などの語句の学習(大村が作成した「国語教育通信」に掲載した、注意すべきことば、学習すべきことば)。
- ・表記(漢字・かなづかい等)。
- ・文字の書き方(あまり乱暴でなければよい)。
- ・目次、あとがき、表紙のことば、さくいん(注 原文の表記に拠る)。
- ・表紙、とびら、見返し、奥付、きちんととじてある。

最後の2項目は、学習記録を学期末・学年末に自分だけの1冊の本として編集させる活動を組んでいたため設けられた項目である。例えば、本書の第Ⅲ章には東京都大田区立石川台中学校生徒、小西まゆみの3年間の学習記録合計9冊が、目次を中心に収められている。詳細は割愛するが、中学1年の1学期末(昭和47年6月)に提出された学習記録「ふたば」の185頁に始まり、中学3年の3学期末(昭和50年3月)に提出された学習記録「旅立ち」前編が394頁、後編は546頁に及ぶ。小西まゆみの学習个体史としても注目できよう。つまり、大村実践では生徒自ら行うノートづくりによって成果を挙げているのである。この事実は上述した3課題を解決するためのパラダイム変換を促す。教師主体のノート指導から、児童主体のノートづくりへ。以降、本研究の立場とする。

1・4・5・6項目は、言語事項及び表記に関する指導である。上述した「課題b：書き慣れる」に対応していると考えられ、視写の有効性も実践例から確認できる。

さて、大村実践の学習記録の自己評価表2項目目「すべきことがしてある」、3項目目「内容(正しさ、ゆたかさ)」に注目したい。これに関して、当時の雑誌社記者からの「一定の型は決まっていないのか。学習過程に沿った形といったらよいかもかもしれませんが」(昭和40年11月筑摩書房「国語通信」)というインタビュー質問に対して、大村は「一つ一つの学習が違うので(中略)型は決まっておりません。決められないのです。」と答えている。事実、大村(1984)で紹介されている、小西まゆみの学習記録「話すこと・聞くこと」領域では、級友の発言を要約して記録することに重点がある。一転、「読むこと」の学習では「古典を読んで」という文字数が多量の意見文が書かれている。この「単元や教材に応じた学習記録」というスタイルは、鹿児島国語研究会原国会の「教職10年以上グループ」のアンケート回答と合致する。つまり、国語科授業の深まりと比例するように、教材の特徴を生かしたノート型式へと変化していくのである。ただ、大村の学習記録は中学生が対象であったこともあり、その型式は「学習の手順に沿って行動し考えたことの記録」「収集した資料」「テストプリント」等、文字通り「学習の全ての記録」であった。一方、鹿児島国語教育研究会原国会の「教職10年以上グループ」は、「学習指導要領の指導過程に沿ったノート型式」が有効であるとした。現行の学習指導要領が「学習過程の明確化」を改定のポイントとして挙げていることを踏まえた時、本研究では「各領域の学習過程を意識したノートづくり」を大切にしたいと考えた。

なお、大村は、学習記録の全体的な指導上のポイントとして「この作業が生徒にとってかなり大変であることを十分に認め、苦労を柔らかに包むこと」「うまくヒントを出し」たり、「指導者が生徒の学習記録の一番の愛読者であることを感じ」させたりすることも挙げている。そして、「書かせ始めて一年くらい経ちますと、申し合わせたように皆が帖面に深い愛情を抱き」、「(生徒が)力相応に励み、相応に伸びる」と述べている。ノート指導において、教師の関わり方が大きく影響することも留意したい。⁽³⁾

その他の実践例⁽⁴⁾の分析の詳細は割愛するが、児童自らノートづくりをすることで、正確な筆写力(視写)・情報整理力・自他との対話力・発想の保存及び記録・学びを省察する力の向上が図られることを挙げていた。

2.3. 研究の内容及び方法

以上の分析結果に加え、本研究を以下の内容及び方法で進めることとした。

○ 先述したノート指導上の課題を、児童自らが主語となる「ノートづくり」に読み替えた研究視点の設定及び実践の展開

- ・ 視点1 学業指導面と学習指導面の両面を備えたノートづくり
- ・ 視点2 書くことへの抵抗が軽減されるノートづくり
- ・ 視点3 価値の認識を醸成するノートづくり

○ 令和1年度から令和2年度における鹿児島国語研究会原国会における共同研究(低学年・高学年の年間を通した実践報告)

○ 令和3年度における鹿児島大学附属小学校の中学年学級担任の原之園翔吾教諭との共同研究

3. 令和1年度から令和2年度における取り組み（鹿児島国語研究会原国会との共同研究）

3.1. ノートづくりの視点の設定

本研究を進めるに当たり、鹿児島国語研究会原国会定例会(令和2年2月22日)の場をお借りし、ノートづくりの視点について提案し協議してもらった。その結果、実践上の留意点等を表1及び表2のように決定した。同研究会ではこの留意点等を基に年間を通した実践に取り組み、検証することになった。次項では、同会員による実践から、前述の視点1及び視点3に係る実践「ノートを活用した振り返り」及び「ノートに対する意識の変容」に焦点を当て、ノート例を紹介する。

3.2. 小学校1年生におけるノートづくり～説明文学習における振り返りの変容～

光村図書・１年９月教材「うみの かくれんぼ」は、生き物の隠れ場所と生き延びるための方法を「かくれんぼ」に喩えて説明された文章である。文字の習得段階である１年生のノートづくりはどうすればよいか。鹿児島県姶良市立松原なぎさ小学校の土元春奈教諭の実践を紹介したい。

土元教諭は教職3年目である。本実践は、ノートに単元名や教材名を視写することから始まった。そして視写の過程において、児童の知識や経験を引き出し、学習に対する必要感を持たせ、初発感想の記述へと展開していった。例えば児童Nは「かにがかくれることをはじめてしった」と感想を書いた。そして、「かくれているいきもの（かに）を、ともだちにせつめいしよう」というめあてを設定し、かにが「どこに」「どのようにかくれた」という観点で読み進める学習計画をノートに書き、教材文を読み進めていった。

同研究会では、1 年児童の振り返りに注目が集まった。これに対して土元教諭は、児童Nが「なまえ、ばしょ、からだ、かくれかたというじゅんばんになっている」という文章の書かれ方について、振り返りで記述したことを報告した。また他の児童にも同様の傾向が見られたことを報告した。

表1 ノートづくりの留意点

ノートづくりの視点	授業の中で	家庭学習の中で
共通性 (単元に関わらず)	・学習の振り返りや文章や資料、自他との対話の記録など、今後に活かせるノート型の統一	・粘り強く続けさせたい内容を中心に組み立てる。
個別性 (単元別に)	・単元、領域の学習指導過程に沿った内容	

表2 「読むこと」のノートづくり チェックポイント

視点	内容	チェックポイント	
共通	学業指導	・ 日付，単元名・教材名，筆者・作者名，めあて，まとめ，振り返りの記入をさせているか。 ・ ノートで使う色は 3 色まで。	

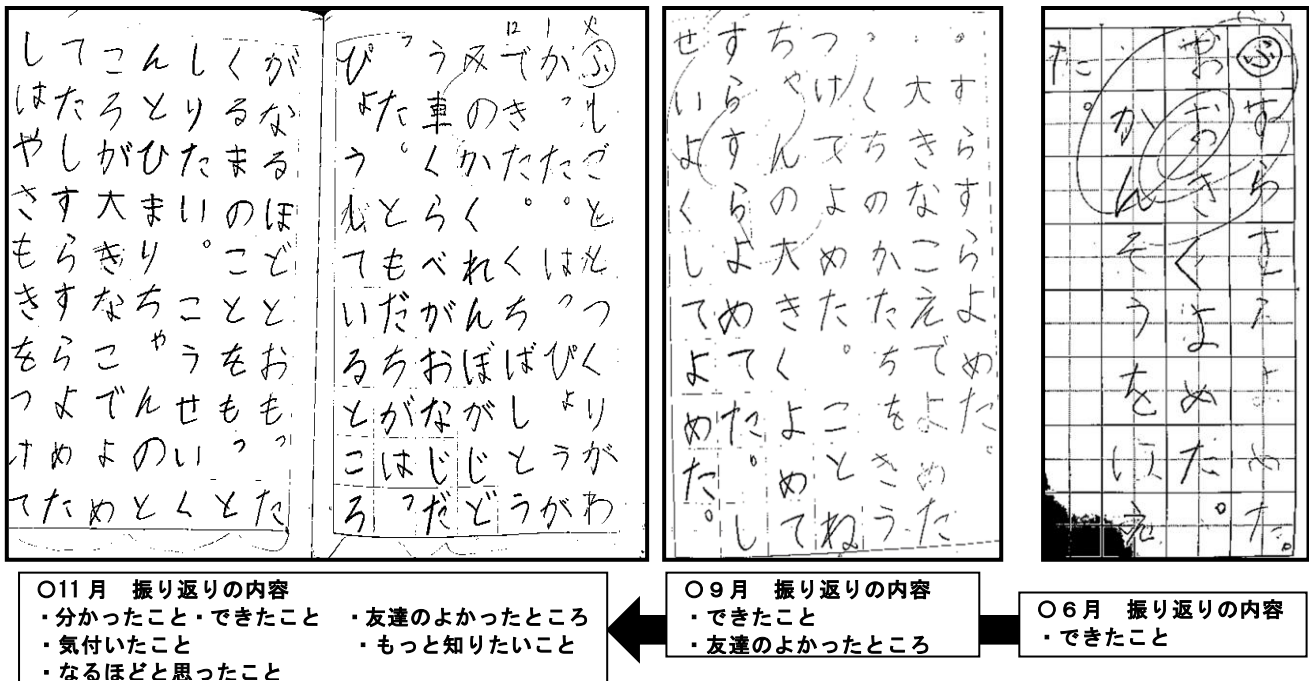


図1 ノート例（土元学級 小1児童Nの振り返りの変容）

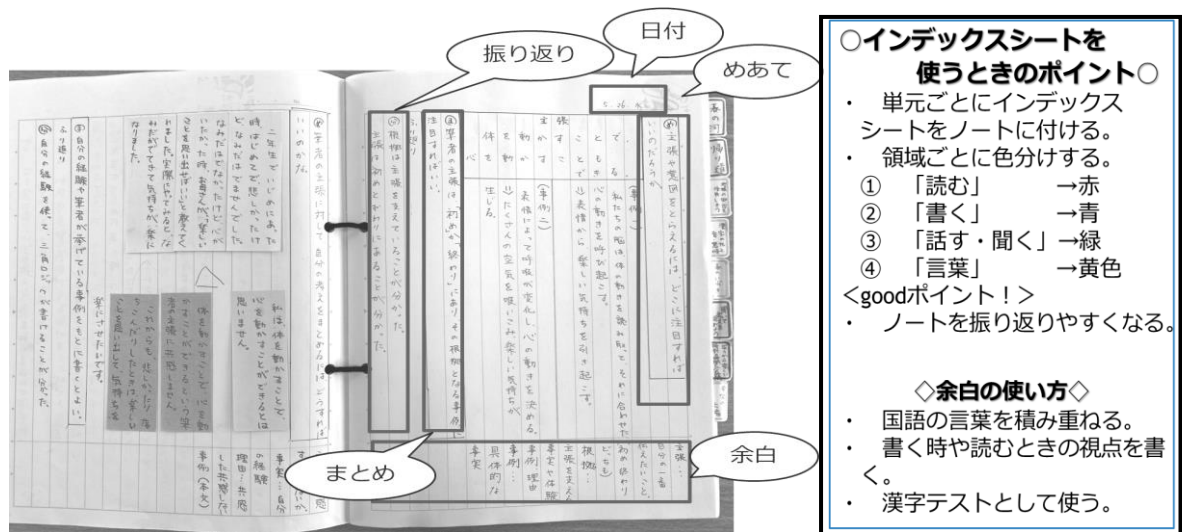


図2 ノート例（作井学級 小5児童ノート）

さらに図1のような一年間の変容を提示し、ノートづくりによって、説明文学習における「自己調整力」が発揮され、見方・考え方の変容に効果があったことを述べた⁽⁵⁾。他会員からは、ノートづくりが1年生の振り返りを可能にし、説明文学習を深化させたことに高い評価が集まった。

3.3. 小学校5年生におけるノートづくり～ノートに対する意識の変容～

鹿屋市立笠之原小学校の作井由希乃教諭は教職5年目である。作井学級では、上記図2のノート型式を1年間継続した⁽⁶⁾。

また、1年間の国語科授業のまとめとして、「ノート自慢大会」を行った。作成してきたノートを紹介し合い、その価値を共有しようとするものである。作井教諭は「ノート自慢大会」終了後、アンケート調査を行い、その結果を基に成果を報告した。

I 児童の追跡調査結果から

① あなたはノートに粘り強く取り組みますか？

4月：はい（10人）、いいえ（18人）

→ 1月：はい（24人）、いいえ（3人）

② 学習したことをノートにまとめることでどのようなことに役立ったり、つながったりすると思いますか？

- ・復習をするとき ・テスト前 ・次の授業で前時を振り返る
- ・頭で考えるより、メモを取った方がまとめやすい
- ・宿題で分からないことがあったとき、ノートを参考にする
- ・振り返りをするとき
- ・将来、大学のテストや面接の時に、自分の考えをまとめるとき

③ 友達のノートをどんな時に見ますか？

- ・自分がどうやって書けばいいか分からないとき
- ・友達の考えを読み合うとき、比べるとき
- ・休み時間に見せてもらう

II 本研究の成果と課題

- ・長い文章を書く時でも集中して書ける児童が多くなった。
- ・物語文を読む時は、どこに注目して心情を読めばいいか、他単元の記録を振り返る児童が増えた。
- ・4月、5月はノートに書く時間がかかり、面倒くさがることがあった。しかし、3学期には書くスピードも上がり、長い文章でも粘り強く書ける児童が増えた。
- ・家庭学習でノートを使用し、自分の考えを整理することができたので、授業では学び合う活動が十分にできた。
- ・1学期と3学期のノートを比較し、自分自身の成長を実感する児童がほとんどであった。
- ・担任として、児童の実態を把握するのにノートを活用した。
- ・ノート余白に書かれた言葉を、整理・抽象化して書かせることで、児童自身の思考過程をさらに明確化できる。今後は、抽象化した表現をさせるために、学習用語一覧表の活用等を考えている。



図3 アンケート調査結果及び「ノート自慢」の様子（作井学級 小5児童）

1年間に及ぶ両教諭の貴重な実践成果を共有するために、再度、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について（報告）」（平成31年1月21日）を確認しておきたい。今期学習指導要領の方向性を決定した同報告は、資質・能力を育成するために「学びに向かう力、人間性等」が生涯にわたる原動力となるため、「学びに向かう力」を評価し指導することの重要性を丁寧に述べている。つまり、「学びに向かう力」とは各教科等に関する興味関心だけでなく、「主体的によりよく学ぶ姿」なのである。具体的には、「粘り強い取組」「自らの学習の調整」という観点を挙げていることも上述した通りである。

両教諭の実践報告内で手に取って見た実物のノートは、1人当たりノート3冊を超えていた。いずれも、質・量ともに充実したものであり、児童一人一人が自ら個別最適化したノートづくりを進める中で、国語科学習を主体的進めてきた「凄み」があった。両名の先生をはじめ、1年間にわたる原国会会員の取り組みに、この場をお借りして深謝申し上げる。

4. 令和3年度の取り組み（鹿児島大学附属小学校 原之園教諭との共同研究）⁽⁷⁾

鹿児島大学教育学部附属小学校の原之園翔吾教諭は、教職10年目である。令和3年度の研究公開のキーワード「構造化」「可視化」の具体的指導法として、ノートづくりを一つの柱とした。

4.1. 視点1「学業指導面と学習指導面の両面を備えたノートづくり」の実際

これまで、原之園教諭は「めあて」「最初の考え」「まとめ（変容した自分の考え）」の主に三つの事柄を記述するノートを作成させていた。このノート型式は、追究すべき課題に対して自身の考えが深まったという事実を明確に示すことができる。しかし、どのような視点で文章を読んだのか、どのような考えと考えを結び付けて新たな考えを生み出したのかといった学びの過程を残しにくいという課題があった。学びの過程の自覚化をさらに促すために、以下の工夫を行うこととした。

- ・学業指導面：日付や曜日、単元名、頁番号を明記させ、学びの過程を振り返らせる工夫
- ・学習指導面：視写活動を通して「学習の見通し」をもたせる工夫

実践は、令和3年4月から開始した。まず、図4右側のように学習した日時等を記入させた。これは、いつ、どの単元で、どのような学びを行ったのかを自覚化をうながす。すなわち、学びの連続性の創造である。原之園教諭は、児童が「自身の学びを振り返る」という汎用的な学び方を着実に習得する姿を観察しながら、ノートが重要な学習ツールとして効果を挙げていることを実感した。

次に、図4左側のように、新単元の導入時には教科書の扉絵をノートに「視写」させた。これにより、「これからどのような物語を読むのか」「そこではどのような学習を行うのか」そして、「本単元でどのような言葉の力を身に付けるのか」という「見通し」をもち、学習の構えを身に付けていくことができた。

次頁の図5は、令和3年6月の公開研究会において原之園教諭が行った文学的文章教材「まいごのカギ（光村図書3年上）」おけるノート例である。このノートを記録した児童Sは、当初「(主人公の気持ちは)ジェットコースターみたいに気もちがくりかえされている」と記述している。しかし、「まとめ」には「わくわくしたい本当の気もちと、そんな自分がいやになる気もちの間でまよっている」と変容した。このプロセスはノートから見取ることができる。児童Sはノートの上部に



図4 ノート例（4月 小3児童ノート）

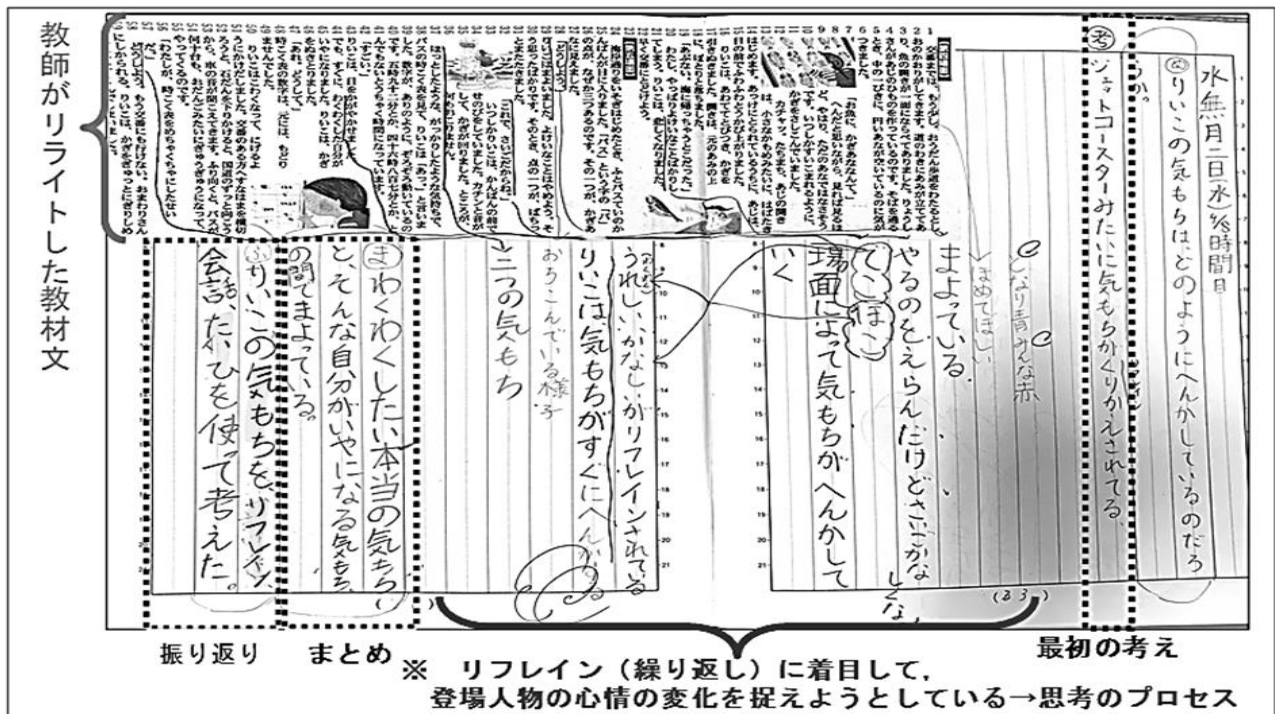


図5 ノート例（6月 小3児童ノート例）

添付した教材文から、課題解決の足掛かりとなる言葉や文（根拠）を見つけ、自分の気付きや考えと線で結んだり、他の考えと線でつないだりしている。すなわち、自身の思考を可視化し構造化することで、読みを再構築しているのである。これは、図5のノート型式そのものが「自分がどの言葉に着目し、いかに考えているのか」を自覚化させ、読みの再構築に寄与していることがうかがえる。また、振り返りに、当初気付かなかった文章表現上の工夫である「リフレインや会話文から考えた」と記述している点にも着目したい。言語形式面に着目したこの記述は、他場面や他文章の読解の際の「知識」として繋がっていくと考えられる。

4.2. 視点2「書くことへの抵抗が軽減されるノートづくり」の実際

上述した「視写」に加えて、ノート冒頭頁に教科書資料「言葉の宝箱」の縮小資料を添付させている。書くことへの抵抗は、「書き慣れ」と「語彙力」の補完によって軽減される。実際、児童は自分の考えを表す最適な表現になるように、「言葉の宝箱」を繰り返し見返すことで、言葉の吟味・検討を行ことができ、書くことへの抵抗感を減らしていったように思われた。

4.3. 視点3「価値の認識を醸成するノートづくり」の実際

年度初めに、新しいノートを手にした児童は、「手でなでてつるつるした感触を味わう」「においをかぐ」「私の『〇〇ちゃん』と名前を付けて呼ぶ」など、知覚を通してノートとの出会いを楽しむ。そこには、すでに“愛着”が芽生えている。だからこそ、最初の一文字目を書くとき、児童の顔は真剣になる。このような“愛着”を出発点とし、年度末にはノートを“価値あるもの”として捉えさせたい。そこで、原之園学級のノート1頁目には「目次」が作成されている。単元が進むにつれ

て、「目次」は追記されていく。自身の学びの足跡を刻むのである。時間を経るにつれ、ノートが“愛着”あるものから、自分の努力や成長を示す“価値あるもの”になっていく。

また、先述したように、ノート各頁には思考過程が可視化されている。振り返りの頁には、読解において有効に働く「視点」や「思考方法」が自身の筆跡で残されている。そのため、児童は前頁をめくすることで、既得の言葉の力を想起することができる。自身の学びの過程や得たものを伝えてくれるノート。自身に言葉の力が身に付いてきていることを証明してくれるノート。このようなノートづくりこそが「価値の認識を醸成する」ことにつながっていく。今後も研究を進めたい。

5. 研究の成果と課題

本研究では、学校現場が求める「ノートの姿」を軸に、3つの視点から実践的研究を進めてきた。その結果、低・中・高学年において、各単元を超えた「共通性」と、各単元の特徴を生かした「独自性」を備えた型式が有効であることが分かった。

特に「ノートを手で書くこと」自体が、児童のメタ認知を促し、粘り強く取り組むことの価値認識へと導くことが明らかになった。毎日、児童のそばにいる各担任が異口同音に「子供たちの学びの姿が質的に大きく変容した」と述べている。重要な点として記憶したい。

今後は、児童の変容を統計的に測定していく。

6. 注記

- (1) 白井 俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来:エージェンシー、資質・能力とカリキュラム』, ミネルヴァ書房, 2020
- (2) 大村はま著『大村はま国語教室 第12巻 国語学習記録の指導』, 筑摩書房, 1984
- (3) 書くことにおける教師の関わり方については、数多くの先行文献が「称賛」から出発することの大切さを述べている。例えば、菅原稔は『倉澤栄吉・野地潤家監修 朝倉国語教育講座4 書くことの教育』(朝倉書店 2006)において、「書き上げた手応えとか誰か一人の賞賛が、以後書く作業に没頭させた経験はよく語られている」と述べている。
- (4) その他の先行実践例として、「池田久美子著『視写の教育―“からだ”に読み書きさせる 大学の授業実践』(東信堂 2011), 「日本国語教育学会監修『ノート指導 ―子どもの自己学習力を育てる』(東洋館出版 2015)」及び「堀江祐爾他編著『深い学びに導く国語科「物語教材」のノート指導』(明治図書 2019)を参照した。
- (5) 土元春奈著「令和2年度 始良・伊佐地区教育論文 単元を意識したノート作り～段階的な指導を通して～」(2011)
- (6) 作井由紀乃「令和2年度 鹿児島国語研究会原国会発表資料 国語科ノート指導の充実～考えを整理しながら書くことができる子どもの育成を目指して～」(2011)
- (7) 本論文の項目「4」は、原之園翔吾氏が「令和3年度 鹿児島大学附属小学校研究公開 研究授業」に到る3か月間の実践を基に執筆した。